

「神はすべての民の御母である  
マリアを通して  
まことの平和への道を示される」

パウロ・マリア・ジークル神父の講話

すべての民の御母を讃えて  
祈りの日



「この絵を世界にもたらしなさい！  
今、わたしはあなたの国だけにではなく  
全世界について言っているのです。

世界は墮落の中にあります。

世界は次々と続く大惨事に苦しんでいます。  
この世界は経済的にも物質的にも破滅に向かっていきます。

『まことの霊』の助けが来ないかぎり、  
戦争は終わらないでしょう。

人びとを十字架のもとへ再び連れ戻しなさい！」

1951年11月15日 アムステルダムメッセージ

# すべての民の御母を讃えて 祈りの日

ランクセスーケルンアリーナにて 2009年5月31日聖霊降臨祭

パウロ・マリア・ジーグル神父の講話

## 神はすべての民の御母であるマリアを通してまことの平和への道を示される

兄弟姉妹の皆さん、遠くから足を運んでくださった巡礼者の皆さん！

ちょうど50年前の今日、1959年5月31日は、聖母マリアがアムステルダムに「すべての民の婦人、御母」として最後に出現された日です。(1) その五十周年を、今日、ヨアヒム・マイスナー枢機卿の司教区にて祈りの日としてお祝いできるとは、なんと素晴らしいみ摂理でしょう。この祈りの日を行うことで、「あなたがたは毎年、この絵のもとに、玉座を囲んで国々の民が集まるように取り計らわなければなりません。これは、マリア、ミリアム、すべての民の婦人が世界に与えることができる大きな恩恵なのです。」(1955年5月31日)と聖母がすでに54年前にはっきりとお望みになられたことを私たちは実行できるのです。そういうわけで、特別な恵みを与えるために私たちをここに招待してくださったのは聖母で、今日の祈りの日の主催者は聖母マリアだと言えます。



## すべての民の婦人の到来—マリアの時代の頂点

皆さんの多くはもう何年も前から、すべての民の御母を熱心に信心されていることでしょう。しかし、今日はじめてここへ来られた方々—その数は少なくありません—のために、すべての民の婦人の持つ唯一無二な意味について少しばかりお話ししたいと思います。

1830年、パリ、リュウ・ド・バック(2)で無原罪の聖母は不思議のメダイを啓示なさいましたが、そのご出現が、「マリアの時代」の幕開けとなりました。この時代がそのように呼ばれるのは、聖母が、それ以前の時代には見られないほどに様々な場所で、特にヨーロッパにおいてご自分の母性的愛や現存を示されたからです。

教会認可のあるご出現だけを考えてみても、ラ・サレット、ルルド、アイルランドのノック、ファティマ、ベルギーのブーラン、バンヌーなどがあります。

力強く護ってくださる聖母の存在と、聖母の存在を近くに感じられることが私たちには何よりも必要だったのです。というのは、ここ180年来、民族、教会、そして世界を破壊しようという、サタンの神に対する攻撃はかつてないほどに激しさを増しているからです。

無原罪の聖母の到来と不思議のメダイの啓示(3)により、私たち皆にとって、大変重要な「マリアの時代」が始まったのです。







そして、「すべての民の婦人、御母」がアムステルダムへ来られたことにより、「マリアの時代」はその頂点を迎えます。(4) これを聞いて驚かれた方もいらっしゃるでしょう。しかし、これからの説明によって納得していただけることと思います。

アムステルダムの聖母のご出現を通して示された神のお望みを私たちが実現するなら、そのことは、私たちを新しい時代へ、新しい聖霊降臨へと導いてくれるでしょう。

アムステルダムのご出現の一連の出来事はなるほど50年前のことです。しかし、その時代性を失ったわけではありません。それどころか、その反対なのです！

なぜなら、教会と世界を見渡すいたるところ、事実上ほとんど解決策が見出せない危機的状況にあり、世界平和がかつてないほど脅かされている今日、すべての民の御母のご出現は、比類ない意味を持つことになるのです。

家族や民族の間に待望の平和が訪れるためには、アムステルダムですべての民の御母が望まれたことを、今、今日、いかに正確に私たちが実行に移すかにかかっているということを、近い将来のために、私たち皆がどうしても深く理解しなければなりません。すべては私たちの協力次第なのです！

## ファティマに学ぶ

巡礼者の皆さん、アムステルダムのご出現に関して、私たちの協力がいかに決め手となるか、それを皆さんに示すために、ファティマ(5)を思い出していただきたいと思います。

ファティマの例は、私たちがマリアの言葉に重きを置かず、マリアの願いにおよび腰で従った場合、いったいどのような結果を招くかということを劇的に示しています。

ファティマの超自然性は教会の最高権威によって認可されました。しかしながら、それと矛盾することですが、聖母が望まれたことを実行に移すのにあまりにも長い間待ち過ぎたのです。

1917年、第一次世界大戦の終焉期、ロザリオの聖母はポルトガルで、ロシア(6)に対して、またその無神論的イデオロギーが世界に蔓延することに対して警告されました。しかし、人々はその警告を真剣に受け止めませんでした。こうして攻撃的無神論が瞬く間に広まり、国々に次から次へと情け容赦なく奇襲攻撃をかけ、それらを屈従させていきました。

ここに、1968年、ロシアのチェコスロバキアへの奇襲攻撃の様子がスクリーンでご覧いただけます。ここプラハに、学生たちと父親たちが、すでに起こってしまった事実を前にして、夜通し、なすすべもなく立ちつくしています。(7) ブラティスラバのこのスロバキア人労働者は(8)、ちょうど工場から家へ帰る途中にロシアの戦車に出会い、絶望の苦しみのあまり路上でシャツを引き裂いています。

ロシア国内だけで、5万もの教会と修道院が破壊され、グラック(シベリアの囚人収容所)で何百万人もの人々が命を落としました。もし、私たちがファティマの聖母の警告に従っていたなら、これらのことはすべて回避することができたのです！

同じように、ロザリオの聖母は、第二次世界大戦についても警告されました。しかも勃発する20年以上も前にです！



共産思想、ナショナリズム(9)、そして第二次世界大戦を回避するために、聖母は具体的な方法を明かされました。それは、ロザリオの祈り(10)、初土曜日の罪人のための償いの聖体拝領、そして、汚れない聖母のみ心への奉獻です。

残念なことに聖母の母としての願いは聞き入れられず、何百万人もの人々が強制収容所(11)で、そして前線で死んでいきました。戦場で生き残った戦士は、捕虜となりました。この写真(12)は、ドイツ人捕虜がシベリアへ送られる前にモスクワで撮られたものです。神を思い起こさせるすべてのものを、どれほどの憎しみをもってサタンが破壊しようとしているか(13)、おそらく世界一有名で美しいといわれるベネディクト会のモンテ・カシノ修道院が最も良い例として挙げられるでしょう。こちらの写真は爆撃前(14)で、こちらは爆撃後(15)のもので

ヨーロッパの都市は、とくにドイツの都市は、瓦礫の山と化しました。広島と長崎に関しては言わずもがなです。これは、1945年9月の広島の航空写真です。戦争の歴史の中で初の原爆が投下された一ヶ月後の写真で、町が破壊しつくされています。(16)

今日、私たちはケルンにいます。そこで皆さんにこの写真をお見せしたいと思います。

これも1945年に撮られたもので、ケルンの町です。他のドイツの多くの町々がそうであったように、まるでゴーストタウンのようです。(17) 私たちがファティマの聖母の言葉を真剣に受け止めなかったのも、このような結果を招いてしまったのです。これらの言語に絶する苦しみと悲惨さをすべて回避することができたのだと考えると、震撼とします。



## マリア、アムステルダムへ来られる



しかし、愛情深い御母マリアは私たちを決して見捨てられません！ 第二次世界大戦が終焉を迎える頃、聖母はオランダで再び助けの手を差し伸べられました。1945年3月25日、受胎告知の日(18)に、聖母はアムステルダムの40才のイーダ・ペアデマンの住まいに密やかにお現われになりました。すべての民の御母は、約14年間にわたって56回出現され、個々の国々と民族に向けてお話しになりました。ドイツに向けては最も多くのメッセージを残されています。聖母は、教皇様、司教方、司祭方、修道者たち、家族、男性たち、女性たち、子供たちに向けて、良い意向を持つすべての人々に向けて話されました。聖母は母として、信仰の衰退、モラルの墮落、災害、戦争について警告されました。聖母はご自身で言われる通り、私たちを迫りつつある世界的大災害から救い、聖霊に満たされた新しい時代、平和の時代へと導きたいと思われているのです。そのために、すべての民の御母は、秘跡の持つ、特にご聖体の秘跡の持つ神力的と貴重さを私たちに思い出させようとされます。一度イーダは天空に大文字で「愛」と書かれてあるのを見ました

が、御母は私たちにとりわけ、愛を願われています。ですから、御母は人類を愛の頂点である十字架へ、いつくしみの泉である十字架へ、創造の中心へと導かれるのです。このような理由から私たちは意識的に、このケルンアリーナ会場の真ん中に、私たちの救い主の十字架といつくしみのイエスのご絵を設置しました。

## 幻視者イーダ・ペアデマン

はじめてこの祈りの日に参加された方が多くいらっしゃるの、私は是非とも幻視者のイーダ・ペアデマンについて一言お話ししたいと思います。

この写真(19)は彼女が27才の時のものです。イーダは大変控え目な人で、司教と霊的指導司祭に対する彼女の従順は模範的なものでした。彼女に近い人は皆、結婚していないにも関わらず彼女が大変母性を感じさせる婦人であったことを経験しています。

すでに12才の時、習慣だった週に一度のゆるしの秘跡を受けたその帰り道、イーダは光り輝く白い衣の婦人との初めての出会いを経験しました。それはちょうど1917年10月13日、すなわち、ファティマで聖母の最後のご出現があり、太陽の奇跡(20)が起こった日でした。しかし、当時12才のイーダがそのことを知るはずありませんでした。

晩年、この写真でござんいただけるように(21)、イーダは彼女が受けた衝撃的なヴィジョンについて語りました。それらの中には避けることができたはずの数多くの悲劇的な出来事ばかりではなく、愛の聖霊降臨によってこれから必ず起こるはずの、教会が刷新された素晴らしいヴィジョンもありました。





イーダは1996年6月17日に死を迎えました。当時のハーレム-アムステルダム司教区のヘンリック・ボーマス司教が葬儀を行われました。(22)もし、ご出現とメッセージの真実性を確信していなければ、ボーマス司教が自ら葬儀を執り行うことは決してなかったろうと私は考えます。

葬儀ミサの際の説教で、司教は次のように言われました。

「私たちはイーダ・ペアデマンさんを愛し、尊敬し、高く評価していた者としてここに集まっています。私はイーダさんをよく存じ上げていた、とここで申し上げたい。彼女は最後の日までことごとく冷静で、他人から褒められることを大変嫌いました。彼女は大変正直な人であったこと、自分が体験したことについて真実を述べていたことを私は疑いません。」



## 真実性の証拠

イーダに対するこの肯定的な意見を、司教はもちろん彼女との個人的な出会い、会話を通して持つに至りました。しかしそれは、アムステルダムにおいて、神がマリアご出現の歴史において他では見られないほど数多くの、感嘆すべき真実性の証拠を与えてくださったことにもよると思われま

す。すべての民の御母は、メッセージについてこう言われています。「私のしるしは私の言葉の中にあります。」(1957年5月31日)これは、メッセージの中で告げられたことが成就することによって、そして成就する度にメッセージが本物であることが証明されるということです。ここでは時間が限られていますので、少しでも例をお話ししましょう。

すでに1950年にイーダはドイツ再統一を見えています。御母はあるヴィジョンを通してイーダにドイツの中を走る太い線をお見せになり、言われました。「ヨーロッパは二つの部分に分けられました。」(1950年12月10日)その後、聖母は手を動かして、この線をなんなく消してしまわれました。

それからほとんど40年後の1989年、私たち自身がベルリンの壁の崩壊(23)の目撃者となりました。この崩壊の10ヶ月前に、ドイツ民主共和国のホーネッカー大統領は、「壁はまだ100年あり続けるだろう。」(24)と発言したばかりでした。壁崩壊のほんの数週間前、1989年10月に行われたこの軍隊のパレード(25)を目の当たりにすれば、ホーネッカー大統領の確信はたやすく理解されます。

また、イーダは1969年のアメリカによる月面着陸(26)を、それが起こる23年前に見えています。この時イーダは、自らの身に無重力状態を体験し、その様子を克明に霊的指導司祭に報告しています。(1946年2月7日)





またある時、イーダはヴィジョンの中でペトロ大聖堂に導かれました。そこで彼女は白いミトラを被った世界中の司教たちと、ティアラを被り厚い本を手にした教皇様を見ました。(27)1951年2月11日に見たこの印象的なヴィジョンが、それから11年後に行われる第二バチカン公会議の様子だと、いったい世界中の誰が知り得たでしょう。イーダにはそれこそ何のことも全く理解できませんでした。



おそらく最も強力な真実性の証拠を、聖母はイーダに1958年2月18日から19日にかけての夜中にお与えになりました。聖母は、10月の初めに、つまりそれから8ヶ月後に、当時はまったく健康であられた教皇ピオ12世(28)が亡くなれることを告げられたのです。

「お聞きなさい。現教皇ピオ12世は、今年の10月の初めに私たちのもとに迎えられます。すべての民の母である共贖者・仲介者・執りなし手は、彼を永遠の喜びへと招きます。」



聖母はイーダに、このメッセージについて誰とも話さないことを望まれました。霊的指導司祭はイーダが沈黙を守ることを尊重しましたが、イーダが秘密の内容を密封封筒に入れ、彼のもとに置いていくことを望みました。イーダはそのコピーを自宅に保管しました。

実際に教皇ピオ12世は10月の初め(1958年10月9日)(29)にキャッスル・ガンドルフォで亡くなりました。その日のうちにイーダは霊的指導司祭を訪ね、いまや現実となった、あのメッセージのコピーを見せました。この真実性の証拠は、司祭として人の死ぬ日を定め知ることができるのは神以外にないことをあまりにもよく知っていた指導司祭にとっては、なおさら説得力のあるものでした。この司祭、フレイエ神父O.P.(30)は、封印されたままのメッセージをローマに送りました。バチカン公会議や聖人教皇の生死を、真実性の証拠として神が使われるとするなら、教会と世界にとってアムステルダムのメッセージがいかに重要か、うかがい知れるでしょう。



## 教会の見解

もちろんその結果として、フィバース司教とその後継者だけがアムステルダムの出来事に関わるのではなく、ローマの教理聖省も取り組むことになりました。司教区委員会による質問、調査は何年にも渡りました。1974年5月、教理聖省はハーレム司教区のツワルトクルイス司教に一本の手紙を送り、オッセルヴァトーレ・ロマーノには、「non constat de supernaturalitate」(現時点までは「超自然性は」まだ「確定されていない」)という見解通達を掲載しました。



22年後の1996年、一国内外からの嘆願が功を奏し、教理聖省にも相談したうえで、アムステルダム司教区のヘンリック・ボーマス司教とヨゼフ・M・プント補佐司教は、マリアを「すべての民の婦人」という称号のもとに、公に崇敬することを公式に許可されました。(写真31:1998年第二回国際祈りの日にて両司教、その後ろにローマから出席され主司式されたオーストリア人のアルフォンス・M・シュティックラー枢機卿 † 2007。枢機卿はアムステルダムのメッセージが本物であることをずっと信じておられた。)



このことは通達によって公にされましたが、それはちょうど13年前の今日、1996年5月31日のことでした。そこには次のようにあります。

「出現の超自然的特性とメッセージの内容に関して、現時点において教会は何の言及もなし得ない。その件に関しては、各々が自己の良心に従い自由に判断することが許されている。『主イエス・キリスト 御父の御子よ・・・』という祈りは、その祈りに含まれる『すべての民の婦人(御母)』という称号と共に、すでに1951年に当時ハーレム司教区司教であったフィバース司教によって教会認可を得ている。またこの称号のもとにマリアを公に崇敬することに対し、我々の側には何の懸念もない。」

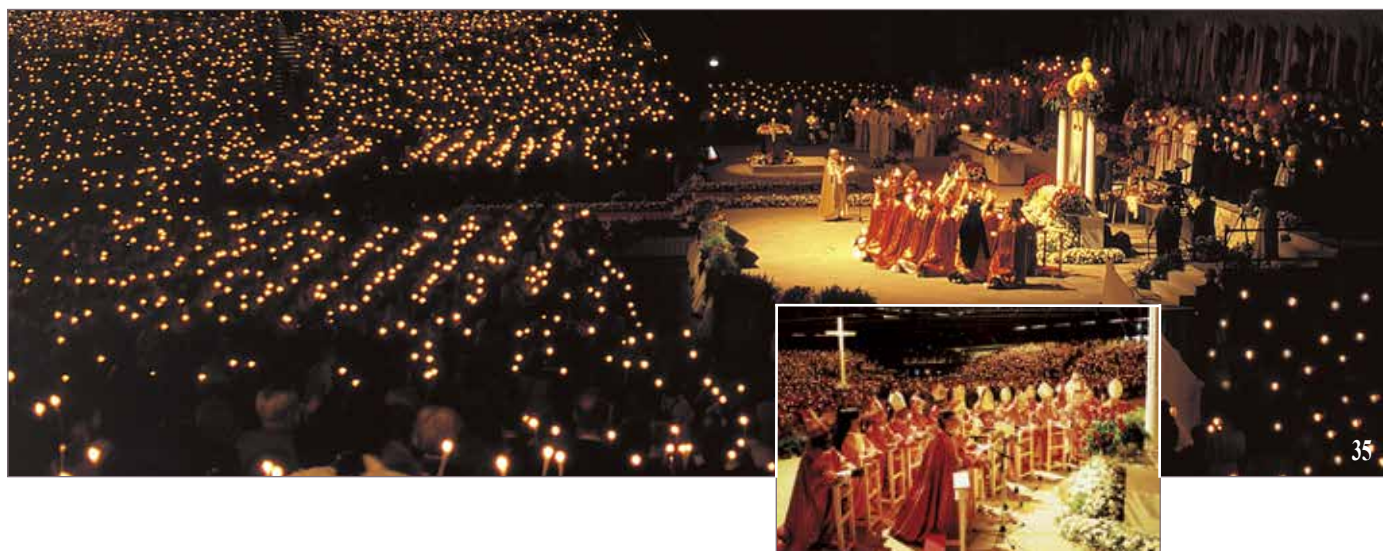
今日の聖霊降臨の祝日に、このランクセス-ケルンアリーナで私たちがアムステルダムに  
来られた聖母についてこのように公に語れるのは、アムステルダム司教区ヨゼフ・M・プ  
ント現司教が2002年5月31日に、1945年から1959年に  
わたったアムステルダムでのすべての民の御母のご出現に関  
して、通達の中で立場を明らかにされたからです。(32)  
プント司教の通達には以下のように書かれています。

「すでに知られていますように、私の前任者であるH・ボーマス司教  
と私は、1996年にこの称号に対する公的崇敬の許可を与えました。  
その間、6年という月日経ちましたが、私はこの信心が世界中の何  
百万人もの霊的生活に確固たる地位を占め(33)、多くの司教方の支  
持を得ていることを確認いたしました。(34)

聖座の持つ責任を完全に認めつつ、その上で教区内で起きた、また  
起きている私的啓示の真実性について良心にもとづいて態度を  
表明することは、第一に現地司教の務めです。

このため、私は以前の調査結果について、またそこから生じる疑問  
や反論について、今一度数名の神学者および、心理学者の助言を  
求めました。また、自分の司教区内に『すべての民の婦人、御母』と  
してのマリアへの大きな信心活動をもつ司教数名に、霊的実りとさら  
なる発展に関する判断を求めました。(35)

これらの所見、証言、信心のもたらす働きをすべて考慮し、祈りと神  
学的考察のうちに熟考したうえで、私はアムステルダムにおける『す  
べての民の婦人、御母』のご出現は超自然的なものに由来すると確  
認するに至りました。」



## 称号—すべての民の婦人、御母

聖母はすでにご最初のご出現の際に、聖書的な素晴らしい称号、「婦人」を名乗られ、メッセージの中で150回以上もこの新しい称号を用いられました。

「私は婦人、マリア、すべての民の母です。すべての民の婦人とも、すべての民の母とも、どちらで呼んでもいいのです。」(1951年2月11日)

なぜ、すべての民の「婦人」なのでしょう？ 聖母がなぜ今、今日、「婦人」という称号のもとにご出現になるかを深く理解するためには、当然聖書を開いてみなければなりません。なぜなら、聖書だけがこの言葉の完全な意味を私たちに教えてくれるからです。



1. すでに創世記の始めに、息子とともに蛇の頭を打ち砕く婦人が登場します(36):

「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に私は敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」(創世記3, 15) ≪訳注; 使用した日本語の聖書、新共同訳では、「婦人」に相当する箇所は「女」と訳されています。≫

カトリックの聖書学は、自分の息子とともにサタンに打ち勝つこの婦人をマリアであると認めるのに決して躊躇しませんでした。アムステルダムでもマリアはこう言われています。

「私はこの足で蛇を踏み砕きました。いつもそうであったように、私は御子と一致していました。」(1951年8月15日)

「預言されているように、婦人はサタンに打ち勝つでしょう。婦人はその足でサタンの頭を踏み潰すでしょう。」(1955年5月31日)



2. カナの婚礼で私たちは、祈りつつ恵みを取り次ぐ婦人に出会います(37):

「イエスは母に言われた。『婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。』しかし母は召し使いたちに、『この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください』と言った。」(ヨハネ2, 4-5)

イエスはここでご自分の母に向かって、「婦人」と呼びかけられています。それは御母を拒否しご自身との距離を置くためではありません。そうではなく、御母の持たれる母としての普遍的使命を思い起こさせるためでした。アムステルダムで聖母はカナについて意識的に言及されました。ひとつには、彼女の御子への完全に調和一致した関係を示すため、またひとつには、聖母が「婦人」として奇跡を懇願することを、イエス自身がお望みになったということを示すためです。

「ご自分の大いなる奇跡を行うのを待っておられたのは、主イエス・キリストご自身ではありませんでしたか？・・・」今度は声をひそめ、でもはっきりと言われます。「・・・水をぶどう酒に変えるという偉大な奇跡を、母が言うまで待っておられたのは？ イエスは奇跡を行うおつもりでしたが、母が言うまで待たれたのです。これを理解できますか？・・・この考えは、婦人と主との関係を理解するうえで役立つでしょう。」(1956年5月31日)

3. ヨハネの福音書は、カルワリオで主と共に贖う婦人について書いています(38):「イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、『婦人よ、ご覧なさい。あなたの子です』と言われた。」(ヨハネ19, 26)



教皇ヨハネ・パウロ二世が言われたことを聞いてみましょう。  
「カナと十字架の下、この二箇所荘厳な場面で、イエスは『婦人』という称号で聖母に呼びかけられています。(ヨハネ2, 4、ヨハネ19, 26参照)婦人としてマリアは救済の業に結ばれています。主は『男と女』として人間を創造され、(創世記1, 27参照)救済の際にも主は新しいアダムの助けに、新しいエヴァを用意されました。人祖の一组は罪の道を選びました。新しい一组として、神の御子は御母の協力のもとに、人類をもととの尊厳へと回復させるべきでした。」(1997年4月9日)

「イエスの時、母の時、教会の時に、救済の言葉は荘厳に告げられ、そこに告げられることを実現するのです。その言葉とは、マリアはキリストの弟子たちの母、すべての人の母として選ばれた、というものです。」(1983年3月8日)

このことをアムステルダムの1952年4月6日のメッセージは裏書きしています。

「十字架上でご自身を犠牲として捧げられた時、御子はこの称号を全世界に告げられました。」



4. 最後に、黙示録の太陽を着た婦人について読んでみましょう(39):

「また天に大きなしるしが現われた。一人の女が太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのために叫んでいた。また、もう一つのしるしが天に現われた。見よ、火のように赤い竜である。・・・そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり・・・」(ヨハネの黙示録12, 1-4)

教皇ヨハネ・パウロ二世はこれについて次のように書かれています。

「使徒聖ヨハネが天に見た大きなしるし(黙示録12, 1参照)、太陽をまとった婦人をカトリック教会の典礼は正しくも、キリストの恵みによりすべての人の母である、聖母マリアと解釈している。」(1967年Signum Magnumの序文より)

婦人と竜の対決は、創世記の「お前の子孫と女の子孫の間に私は敵意を置く」(創世記3, 15)という言葉の再び思い起こさせます。

マリアはアムステルダムで、1953年12月3日に次のようなメッセージを与えられました。

「地獄の勢力が解き放たれます。それでも、彼らは『すべての民の婦人』を打ち負かすことはできないのです。」



すなわちマリアは、全時代の全人類の母親という彼女の普遍的使命が問題になるときに、つねに「婦人」と呼ばれるのです。

「人類は母に委ねられています。」(1951年8月15日)と聖母は思い起こさせてくださいます。この称号に関して、すべての民の御母はたくさんの慰めの約束をされています。「この称号において、婦人は世界を救うでしょう。」(1953年3月20日)「すべての民の婦人は世界に平和をもたらすことが許されるでしょう。しかし、そのことを人びとはこの称号において願わなければなりません。」(1953年10月11日) 聖母はまことにすべての民族、人種の母であり、どの宗教を信じている人にとっても母なのです。聖母は彼女の子供たち皆を愛しています。まだ聖母の母の愛を知らない人たちをも、そして、聖母の愛を知ろうとも思わない人たちをも聖母は特別に愛していられるのです。

このようなわけですから、持続的な世界平和、本当のエキュメニカル、聖霊における一致を神に嘆願し、私たちに贈ってくださることができるのは、まさにすべての民の御母でしょう。

## 祈り

持続的な世界平和と、聖霊における一致を願い求めるために、聖母はご自分の祈りを与えてくださいました。この祈りについて聖母は最初のメッセージで言及されていましたが、実際その祈りをイーダに教えられたのは、やっと6年後の1951年2月11日のルルドの聖母の日、ちょうどイーダがドイツにいる時のことでした。



この祈りが教会と世界のためにどれ程重要な意味を持っているかということは、第二バチカン公会議(40)の預言的ヴィジョン中にこの祈りが与えられたことだけでも計り知れます。突然このヴィジョンが中断されると、イーダは十字架の前に導かれ、イエスとマリアの壮絶な苦しみと一致させられました。イーダはあまりの苦しみに泣き出してしまいます。イーダ自身にその時の模様を語ってもらいましょう。

「私がまだ婦人と一緒に十字架の前に立っていると(41)、婦人は言われます。

『私の後に続いて言いなさい。』…そして婦人は、『主イエス・キリスト 御父の御子よ…』と始められます。でも、その話し方と言ったら！ 世界中のどんな人にも真似のできないほど、たいそう美しく感動的です。『あなたの霊を今…』の『今』と、『すべての民の心に聖霊を住まわせてください』の『すべて』にアクセントを置いて強調されます。「アーメン」もまた大変美しく荘厳に言われます。私は婦人がおっしゃる通りの言葉を繰り返していましたが、



それが何であるか理解していませんでした。でも、婦人が『アーメン』と言われた時、すべてが大文字で目の前に書かれてあるのが見えました。そこで私はやっとこれが祈りであることに気づきました。不思議なことに、私はこの祈りを暗記する必要がなく、それはまるで私の中に刻み込まれてしまったかのようです。

主イエス・キリスト 御父の御子よ、

あなたの霊を今 全地の上に遣わしてください。

すべての民が墮落、災害、戦争から守られるよう、

すべての民の心に聖霊を住まわせてください。

かつてマリアであられたすべての民の御母が

私たちの執りなし手でありますように。

アーメン

婦人は続けて話されます。『子よ、この祈りはとても簡単で短いので、すべての人が母国語で、自分の十字架の前で祈ることができます。十字架を持たない人はただそのまま祈りなさい…』」



この祈りは聖霊の到来を願う素晴らしい嘆願の祈りなのです。どうぞ、聖霊が今、来てくださり、すべての民の心の中に住んでくださいますように。

どうか民が墮落から守られますように― 私たちは皆、毎日、墮落に、信仰の衰退に、そしてその結果である道德の喪失に直面していないでしょうか？信仰を失う人は、道德をも容易く失いがちです。ポルノやサタニズム(42)による墮落。これらが自殺という結果で終わることもまれではありません。専門家たちの推計によると、ドイツのサタン崇拝者は青少年の間で六万人にも上るとのことです！フライブルクにあるバーデン・ヴルテンベルク州の地方警察本部は、「各学校に最低ひとつの筋金入りのサタニストグループがいる」を捜査の出発点としています。

ロックミュージックや低俗な映画などによる娯楽の分野での退廃。それらはビデオやDVDによって毎日数千万枚も消費されています。ご覧ください。これは今、世界中の映画館で上映されている怪奇映画「地獄へ引きずり込んで」のポスターの写真(43)です。

墮胎(44)による退廃。家族政策研究所は2008年5月7日付けでヨーロッパ議会に、ヨーロッパは墮胎によって毎年ルクセンブルクとマルタ島とを合わせた人口に相等する100万人以上の子供たちを失っているというデータを提示しました。

どうか災害から守られますように― 色々な形の惨事、災難、すべてをなめつくす大火事(45)、ハリケーン、洪水(46)などの自然災害。これらをその破壊的規模ゆえに、今日メディアは「世紀最大の災害」と呼んでいます。数週間前にイタリアのラクイラで起こったような地震による災害(47)。悲劇的なのは、災害による被害が、いつも、罪無き人々にも及ぶということです。同じことが飢餓にも言えます。飢餓は民全体におよびます。ユニセフの情報によると現在、世界で飢餓に苦しんでいる人は、九億人にも上るのです。そして、毎日八千人の子供たちが餓死しています。このことを一度想像して見るべきです！

千八百万人をはるかに超える数の人々が難民生活をしています(48)。この生活が何を意味するかお分かりでしょう。毎日毎日恐怖と疲れと空腹が続くのです。難民のうち、半分以上が子供たちです。子供たちがもっとも被害を受けており、その数は益々増えています。



42



43



44



45



46



48



47





49



50



51

どうか戦争から守られますように― 五カ月前のハイデルベルクの国際紛争調査研究所の発表では、武器なしの、また武器による紛争は全世界で345件にも上っています。(49)この数は1945年の第二次世界大戦以来、最大の数値です。

瞬く間に世界に広がる可能性のある近東で起こっている新たな緊張から、聖母マリアが守ってくださいますように。イランは平和目的のために使用するという大義名分の上に数年来原爆計画を行っていますが、同時に、存在理由なしとしてイスラエル破壊の意志も明らかにしています。おそらくこれが、イランが決して原爆計画を中止しようとしない、そもそもの理由でしょう。(50)世間では、「第三次世界大戦の恐怖のシナリオ」が繰り返し話題になります。(51) 経験豊かな外交官たちの国際間での努力にも関わらず、世界の政治的様相は益々ひどくなるばかりです。これでは、多くの人々が将来に不安を抱くのは当たり前ではありませんか？

この不安について、心理学で最も権威あるドイツ人のクリスタ・メヴェス女史が、カトリック教会の救済機関「KIRCHE IN NOT」がアウグスブルクで催した2006年の「世界教会第二回国際会議」の開催報告で語りました。



52

ここに女史の写真があります。2005年に教皇ベネディクト16世によって与えられたカトリックで最高位の勲章、コムトゥール勲章をマイスナー枢機卿から授与されているところです。(52) そのスピーチの中で彼女はこのような問いかけています。

「すでに存在している原爆の数だけでも、美しい青い地球を、その上に生きている私たちも動植物も一緒にして、千回も破壊し、放射能汚染することができるというのに、どうして不安を抱かずにいられましょうか？ 回教徒が、彼らの言う『神を恐れぬ罪深い西側諸国』に対して自国の人々を聖戦(53)に呼びかけているというのに、どうして不安を抱かずにいられるでしょう？ 世界中に新型の伝染病が蔓延し(54)、しかも進行が速く、治療薬が見つからないのに、どうして不安を抱かずにいられるでしょう？ 産業国がこの40年来、自己抹殺に関わっており、子供ができないように留意し、生まれてこようとする子供たちを、世界中で何百万人も母親の胎内で殺しているという事実を目の前にして、いかに平静でいられましょう？ ドイツだけでも1976年以来八百万人の胎児が殺されています。これによってもたらされる、当然のことながらの経済力低下、ついには食糧危機、貧困と失業という状態を予測するなら、どうして身震いせずにいられましょう？…」



53



54

彼女は信念を持ったカトリック信者として、益々増す生命を脅かす不安に対して、「勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている。」(ヨハネ16, 33)と言われるイエス・キリストへの新たな、生きた信仰が必要であると強調します。



その通りです！キリストは世の救い主です。そして、キリストは私たちにご自分の母親を送ってくださいました。というのは、世界の平和と私たちの時代は聖母に委ねられているからです。聖母ご自身がこう言われています。「この時代は私たちの時代です。それは、御父と御子は『共贖者、仲介者、執りなし手』をこの時代に、全世界に与えることをお望みだ、という意味です。」(1951年7月2日) 私たちが御父と御子が送ってくださった御母マリアに呼びかけないなら、世の中のどんな力をもってしても世の悪に打ち勝つことも、回避することもできません。マリアは2000年前のエルサレムの、あの聖霊降臨の時と同様、教会の母として、すべての民族の母として、私たちのために聖霊に嘆願し、仲介してくださるのです。(55)



## 墮落から災害と戦争が生じる

婦人の祈りに関して、私たち皆にとって大変重要なことを婦人はお話しになります。婦人の言葉を聞きましょう。「すべての民の婦人に、すべての大惨事が回避されるように願いなさい。この世から墮落を追放してくれるように願いなさい。墮落から災害が生じます。墮落から戦争が起こるのです。私の祈りを通して、あなた方はこれらすべてのことから世界が守られるように願わなければなりません。この祈りが、神のみ前でどれ程力強く、重要なものであるかをあなた方は知らないのです。」(1955年5月31日)

災害と戦争は、道徳的退廃から生じるのです！皆さんは、このようなことをこんなに短く、はっきりした言葉で聞いたことがおありですか？これは、途方もなく示唆に富んでおり、そして理解しやすい言葉です。私たちが自分の罪を神のみ前で痛悔しないなら、自分自身を損なうばかりではなく、これによって悪が、サタンが力を得るのです。情け容赦ない憎しみのうちに、サタンはこの力を、私たちが傷つけるために徹底的に利用します。ほんの少数のキリスト信者しかこのことを考えません。私たちの上に災害をもたらす力を、神がサタンに与えるのではなく、私たち自身がサタンに力を与えているのです。神はむしろ、私たちに悪に打ち勝つ力を与えてくださっています。



56



57



58



59



60



61



62

ですから災害と戦争が止むためには、その原因である墮落がなくなるように私たちは力を尽くさなければなりません。そしてそれは、洗礼者ヨハネ(56)の時のように、謙遜と悔い改めの心をもって私たちが回心するということに他なりません。ゆるしの秘跡(57)、祈り(58)、愛の心を持ってのご聖体拝領(59)、隣人愛(60)、断食によって私たち自身が回心することです。そもそもこれらは、どれも誰もが簡単に利用できる方法です。キリスト教徒ではない(61)、神をよく知らない40億人の人たちも、すべての民の婦人がおっしゃったように「**誠実、真理、愛**」(1952年12月8日)を生きる努力をすることによって、自分自身のエゴから離れ、他人の利益を考慮ができるようになります。婦人の祈りを祈る人に聖母がしてくださった素晴らしい約束を聞いてみましょう。

「この祈りを通して婦人は世界を救うでしょう。この約束を私はもう一度繰り返します。」(1953年5月10日)「この祈りが、神のみ前でどれ程力強く、重要なものであるかをあなた方は知らないのです。神はご自分の母の願いを聞き入れてくださいます。なぜなら、母は、あなた方の執りなし手でありたいと望んでいるのですから。」(1955年5月31日)

なぜこの新しい祈りを与えてくださったかについても、聖母は説明されています。「まことの霊が世界の上に降臨してくださるよう祈るために、この祈りは与えられました。」(1951年9月20日)「この祈りがどれほど重要なものになるか、あなたに推し量ることはできません。未来に何が待ち受けているかを、あなたは知らないのです。」(1951年4月15日)

皆さん、実際、未来に何が起こるかを知っている人はいません。(62) しかし、聖母は私たちにひとつの約束 一劇的でもあり、素晴らしくもある約束一 を与えてくださっています。つまり聖母は、「この称号とこの祈りを通して世界をある大惨事から救うことができるようにと、主であり創造主であられる方から、遣わされ」ているのです。「この祈りを通して婦人は世界を救うでしょう。この約束を私はもう一度繰り返します。」(1953年5月10日)

## 「かつてマリアであられた」

これについて、非常に重要なこととお話したいと思います。ほとんどの人がこの「かつてマリアであられた」という表現に戸惑いを感じます。随分前からこの祈りを知っているあなた方の何人にも、きっと同じような経験があると思います。



それは驚くに値しません。この言葉の意味を理解するのに困難を覚えた最初の方は、幻視者自身であり、次には霊的指導司祭のフレイエ神父、そしてこの祈りを印刷するための許可を与えるべきフィバース司教だったのですから。ですから司教は、祈りはとても気に入ったのですが、最初、理解できないこの部分を削除して印刷させました。そのようなことで祈りの終わりの部分は、「すべての民の婦人が私たちの執りなし手でありますように」とされました。

しかし、聖母はこの変更になんとも思いませんでした。『かつてマリアであられたすべての民の婦人が私たちの執りなし手でありますように』という部分は、このままでなければなりません。』(1952年4月6日) 聖母はすでに以前、これについて端的に説明されています。『かつてマリアであった』とは、マリアは『マリア』として多くの人に知られて来たという意味です。しかし今、明けつつあるこの新しい時代に『すべての民の婦人』であることを私は望んでいるのです。このことは、誰にでも理解できます。』(1951年7月2日)

私たちがロザリオの祈りの中で何度もマリアと呼びかけていることからわかるように、「かつてマリアであられた」という意味は、決してもう聖母のことをマリアと呼んではいけない、ということではありません。そうではなく、ただ単にマリアという名前だけを知るのではなく、「私たちの母親」としてのマリアの使命を知り、私たちの聖母への関係が、子供から母への関係になるようにという意味です。(63)

この母と子の関係が、より個人的なもの、より深いものになり得るということは、この写真の少女(64)のように、もちろん私たちカトリック教徒にも言えることです。しかしそれは、世界の大半を占めるキリスト信者ではない人々にもっと言えることです。

多くの人はマリアが「マリア」という名前であることは知っていますが、マリアがすべての民族にとっての母、自分たちの母であることを知りません。すべての民の婦人のご絵を胸に抱きしめている南インドのこの回教徒の少女(65)は、マリアが彼女の母親であることを発見したのです。

もし、人々がマリアを自分の母親として認めるなら、すべては変わります。それまで単に「マリア」だった人を、今私は自分の母親と認め、愛するようになるのです。(66) その結果、子供が母親にするように、すっかり自分自身を母マリアに委ねきり、母マリアに倣いたいという気持ちが沸いて来るのです。(67)



## 祈りの変更

しかしそれならなぜ今日、私たちは元の形でこの祈りを祈らないのでしょうか？ その説明をさせていただきますので、どうぞ皆さんの注意力を集中してください。

ここ数年間、信者、司祭、司教方の中に、この「かつてマリアであられた」という表現に問題を覚える人が繰り返し出てきました。当時、フィバース司教がそうであられたように… そのため、これに関しての質問がローマの教理聖省に繰り返し寄せられました。司牧者としての配慮から、すべての民の婦人の祈りの中の「かつてマリアであられた」という部分は誤解を招く恐れがあるとして、2005年7月に教理聖省の方からアムステルダム司教区ヨゼフ・M・プント司教に向けて、この言葉を省くようにと依頼がありました。

2005年8月8日、顧問委員会調査官ラファエル・ソフナー氏により、これに関する司教の見解についての文書が以下の通り発表されました。

「当然、司教は教理聖省に連絡をとり、この問題に関する自身の意見を伝えました。その一方、彼はこの崇敬に関わる責任者たちに、教理聖省の司牧的懸念を考慮して、差し当たり公の場で祈る際はこの箇所を省くよう、または心の中で祈るよう要請しました。司教は、多くの人にとって、この要請が『確信』と『従順』の間で葛藤を呼び起こすことになることを承知しています。ここで司教は幻視者の例を挙げています。

幻視者自身も一度同様のジレンマに陥りましたが、その際『婦人』の『従順が優先されなければなりません。』という声を聞いたのです。『もちろん』と司教は続けます。『従順であることとは、このテーマに関するオープンな対話をさらに続けていくことを禁じるものではありません。』また『主イエス・キリスト』、『御父の御子』に向けて、『今』この傷ついた世界の上に聖霊を送ってくださいと乞い願うこの祈りが、今の時代にとって非常に重要であるということにはまったく変わりがないのです。

これらすべてのことに司教は肯定的な面も見えています。こうした議論によって、より深い問答が生まれるということです。被昇天のドグマが告知された後でこの祈りは与えられましたが、この祈りの『かつてマリアであられた』というこの箇所には、ひとつの根本的な問いが隠されているのです。その問いとは、神の救済のご計画の最も深いところで、マリアとは何者なのか？ 聖霊の到来の際にマリアはどのような役割を果たすのか？ この時代、この世界においてマリアは誰でありうるのか？

2002年、この問答に取り組むように、教皇ヨハネ・パウロ二世は神学者たちを強く励ましました。」

「すべての民の婦人」という称号が聖母マリアを表すことをはっきりとさせるために「聖母マリア」という言葉を挿入することになりました。この形の祈りに2009年1月6日、司教区ヨゼフ・M・プント司教は教会認可を与えられました。そこで、祈りの最後は次のようになります。

「聖母マリア、すべての民の御母が私たちの執りなし手でありますように」

長年にわたってすべての民の婦人を信心して来た信者の中に、祈りのこの新しい形を受け入れるのに抵抗があるという人に度々出会いますので、皆さんに控え目ながら切実に「従順であるように」とお願いします。愛による従順をです。なぜなら、この方法によってのみ、祈りは教会の祝福とともに、司教方、司祭方の支持を得て、これからも世界中に広められることが可能だからです。このように教会の規則に則って考え、行動することは、婦人のご絵と祈りの普及において、重要、かつ決定的です。ある箇所で婦人自らこのように言われています。「**今、『すべての民の婦人』は、まことの平和を与えると約束しましょう。しかし、人々は教会とともに、…よく理解しなさい、教会とともにです…私の祈りを唱えなければなりません。**」(1953年3月20日)

聖母ならこの様な場面でどのように行動されたか考えてみましょう。聖母も、やはり謙虚に従われたことでしょう。



## アムステルダムのご絵

聖母はご絵をどのように描くべきかを自ら詳しく説明されました。この理由によっても、アムステルダムのメッセージは特別だと言えます。つまりこのご絵をよく観察することにより、誰でもなぜマリアが私たちの母なのかを理解できるはずなのです。(68) もし、キリスト教徒が「なぜマリアはあなたの母親なのですか？」と質問された場合、きっと多くの人が「なぜなら、マリアはイエスの母ですから。そして、イエスとともにマリアは私たちをも身ごもったのですから。」と答えるでしょう。もちろん、これは間違いではありません。しかしこれは、マリアが私たちの母であるということの最も深い理由では決してありません。マリアは三重の理由により、私たちの母なのです。そしてまさにこのことをアムステルダムのご絵は現しているのです。

1. マリアは私たち皆の母です。なぜなら、マリアは彼女の、そして私たちの救い主とともに、共贖者として私たちのために苦しまれたからです。ブラディ・バースの描いたこの絵を見てみましょう。マリアはすべての人類を身ごもり、手をそのおなかに当てているではありませんか。(69) 十字架の下でマリアは新しい命へと人類を生んだのです。ですから、アムステルダムのご絵の聖母は御子の光り輝く十字架の前に立たれており、この光は聖母を通り抜けて輝いています。不思議のメダイに示されているように、母を十字架から、十字架を母から切り離すことはできないのです。

婦人は腰に紐を巻いていらっしゃいます。これについて聖母がご自分で説明されたように、これは御子の腰布を象徴したもので、共贖者マリアと救い主イエスの分かちことのできない一致を表しています。

また、み手には光り輝く傷痕が見えます。この聖痕には初めは驚くかも知れません。カルワリオで苦しまれた聖母は血を流されはしませんでしたから。もし、聖母が血を流されていたら、福音史家が記していたでしょう。しかしここで、自分自身に問いかけてみてください。「聖痕を持った聖人たち、例えばパードレ・ピオ(70)やテレサ・ノイマンと聖母では、どちらが苦しんだでしょうか？」と。もちろん、私たちは神学的に正しい答えである、「聖母」と答えるでしょう。では、ここで聖痕を受けていたテレサ・ノイマンがご受難の苦しみに与っているときの写真をお見せしましょう。(71) テレサ・ノイマンがすでにこの様な凄まじい有様で苦しんだとするなら、十字架の下で御母はいったいどれ程苦しまれたことでしょうか！

まさにこのことについて、教皇ヨハネ・パウロ二世は、1983年5月4日、一般謁見の際に言われています。「救済の神秘において最大の協力者となる使命をもった聖母が、十字架に架けられた御方の犠牲と完全に一致し、そのすべての痛みを分かたれることは、御父のみ旨でした。」これで、なぜアムステルダムの聖母が手に神秘的聖痕をお持ちなのかを、理解していただけるでしょうか？





72



73



74



75

2. マリアは「仲介者」として、御子と一致して諸民族にすべての恵みを仲介してくださるので、私たち皆の母です。このことは、婦人のご絵の中で、聖母の聖痕を受けた御手から三本の光線が発せられていることで表されています。(72) 婦人はこのように説明されます。「これらは、恵み・救い・平和という三本の光線です。人類への愛にかられ、私の主であり師である方の恩寵を通して、御父はその御ひとり子を救い主として世界にお遣わしになりました。いまや御父と御子は、唯一平和であられるまことの霊、すなわち聖霊を送りたいと望まれたのです。ですから、恵み・救い・平和です。」(1951年5月31日)

この光線は、キリストの群れの象徴である白と黒の羊たちの上に、つまりすべての民族、種族の上に注がれています。

聖痕を受けると同時に恵みがあふれ出ている聖母のみ手(73)は、共贖者と恵みの仲介者の関係を明らかにしています。どんな苦しみでも、それを愛によって担うなら、そこから恵みと祝福が流れ出ることを聖母は示しておられるのです。他の言葉に置き換えるなら、贖い主とともに、共贖者として恵みのために苦しんだ者は、贖い主とともにその恵みを分配することができる、ということです。

3. マリアは、神のみ前で私たちのために執りなしをしてくださり、悪とサタンから守ってくださるので、私たち皆にとって母です。

蛇の頭を踏み砕く者として御母がサタンから私たちを守り、サタンを打ち負かすという聖書の教える真実が、このご絵では特別に印象的に表されています。このご絵には不思議のメダイの図柄とは違って蛇が見当たりません。なぜなら、蛇は完全に打ち負かされたからです。(74) マリアの母としての執りなしの力をこれ以上明確に表現することはできません。聖母はまことに太陽をまとい、蛇の頭を踏み砕く方、黙示録の婦人なのです。(75)

ですから私は、すでに聖母の汚れなきみ心が勝利をおさめたことを示すアムステルダムのご絵を「天国的な絵」と呼びたいと思います。この絵は、新しい時代、すべての人々の心に平和が宿る時代、世界的平和の時代のご絵なのです。このご絵を眺め、その前で祈るなら、大きな期待と喜びで満たされるではありませんか！

実にヨハネの黙示録の次の節の神秘が思い起こされます。「神の幕屋が人の間にあって、

神が人とともに住み、人は神の民となる。神はみずから人とともにいてその神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」(黙示録21, 3b-4)

マリアがすべての時代のすべての人々にとって、三重の意味で普遍的に母であることをこのご絵は示していますが、このご絵について聖母は思いがけないことを言われました。「この絵は先行しなければなりません。この絵は全世界に広められなければなりません。これは新しいドグマを絵によって説明したものです。ですから私が自らこの絵を諸国の民に与えたのです。」(1952年12月8日)



## すべての民の御母のドグマ

このご絵が新しいドグマを絵によって説明したものであるとは？ 一体どの新しいドグマのことを婦人は言われているのでしょうか？ 聖母がメッセージの中でドグマについて願われるとは、聖母のご出現の歴史の中でも唯一無二のことです！ 聖母の言葉によるなら、それは「**最後で最も偉大な**」(1951年8月15日)マリアのドグマとなるのです。教皇様に対して、聖母はこのように願われています。「**主の母の戴冠である『共贖者、仲介者、執りなし手』というマリアの最後のドグマのために尽力してください。**」(1953年10月11日)

聖母はメッセージの中で、幾度も神学者たちに向かって直接語りかけもされ、このドグマの信仰内容と偉大な意味について説明されました。「**このことはすべて、数々の本の中に見つけることができると、あなた方の神学者たちに伝えなさい。…私は新しい教えをもたらすものではありません。**」(1954年4月4日)「**教会は、この新しいドグマに対する数多くの反発を経験するでしょう。**」(1951年8月15日)

50年以上経った今日、カトリック教会は実際にこの困難で苦しい状態にあります。一方では、枢機卿方と何百人もの司教方が、「共贖者、仲介者、執りなし手」としてマリアが崇敬されるのを見たいと望んでおられます。有名な神学者、司祭方、そして何百万もの信者たちが同じ望みを持っています。今日に至るまで、マリア神学者や聖人方のなかにも「共贖者」という称号をととても愛し、使用された方々がいました。ヴィンセンツ・パロッティ、アナ・カタリナ・エンメリック、レオポルド・マンディッチ、マキシミリアン・コルベ、エディット・シュタイン、パードレ・ピオ、マザー・テレサなどです。教皇ヨハネ・パウロ二世も幾度も「共贖者」という称号を用いられました。例えば、1982年9月8日の一般謁見の際にはこのように言われています。「あらゆる罪の汚れから免れて受胎され、お生まれになったマリアは、全人類をともに贖う共贖者となるために驚嘆すべき方法で彼女の息子である神の御子の御苦しみに与りました。」

しかし、すべての人がそのように考えるわけではありません。—そして彼らには彼らなりのもっともな理由があります。枢機卿、司教、神学者の中には、救いの歴史の中でのマリアのもつ唯一無二の位置を神学的に正しく表すには、「共贖者」という概念は誤解を招きがちであり、よって根本的に不適当だと見なすという方々が多くいらっしゃいます。

信者の皆さん、次のことを隠さずに言うことが私には重要で、また私の義務であるとも考えます。つまり当時教理聖省長官だったヨゼフ・ラツチンガー枢機卿が、ドイツのジャーナリスト、ペーター・ゼーワルト氏に「神と世界」という彼の本の中で、救いの計画におけるマリアの協力は「他の称号によってもっとよく言い表されている一方、『共贖者』という表現は、聖書と教父たちの言葉から遠く離れているので、誤解を招きかねない。」と語られたということです。ヨアヒム・マイスナー枢機卿もこの問題に関して、同意見をお持ちでいらっしゃいます。(76)



このことを、ここではっきり言っておかなくてはならなかったのです。もし、教理聖省の現状の見解がはっきり提示されるのでなければ、教皇様のもっとも親しく忠実な友であられるケルンの大司教が、「すべての民の御母」を讃えるための祈りの日を大司教の司教区で催すことに許可を与えられることは、決してなかったでしょう。すべての民の御母のメッセージは「共贖者」という称号と直接に関係があるのであります。

巡礼者の皆さん、しかし教理聖省のこうした見解は、司教、司祭、神学者、そして信者が、「共贖者」という称号を使用してはならないという意味ではありません。教会の信頼できる教導職に最大の敬意を払いつつも、神学的な話し合いは自由なのです。

もし、「共贖者」という意味を神学的に正しく説明するなら、この称号によってマリアが、彼女自身がまるで神であるかのようにイエスと同列に置かれるということではないということがはっきりするはずです。むしろ「共-贖者」とは、マリアがイマクラータ(無原罪の宿り)として、新しいエヴァとして、神の御子と完全に一致しながら、私たちの救いのために唯一無二の形で苦しまれたという意味なのです。そして、これはまったくイエスに依存したものであり、イエスからその力を得ているのです。



御子と母は、世界の救いというひとつの目的のため、ひとつの心、ひとつの愛、ひとつの苦しみでした。(77)

聖母はスウェーデンの聖ブリジットにこのように言われています。「アダムとエヴァはひとつのりんごのために世界を売りました。私の息子と私はひとつの心で世界を買い戻しました。」

## 愛の対話

時が来てこの真理をドグマとして告知できるためには、深い研究により、愛をもった話し合いにより、ことに祈りと犠牲によって、「共贖者」という称号に対しての様々な神学的解釈に、遅かれ早かれ見解の一致を目指さなければなりません。

これに関してひとつ言っておかなければならないことがあります。「共贖者」という称号の支持者は、マリアへの誠実な愛を持ちながらも、この表現を不適当と考える人々に対して理解を示さなければなりません。彼らの中にはマリア神学者としてマリアについて重要な書物を書かれた方々もいらっしゃるでしょう。しかし、彼らは、イエスの救い主としての唯一無二の立場が削減されはしないか、エキュメニカルな対話を危うくしはしないかとの配慮ゆえに「共贖者」という称号を使用しない方を選ぶのです。

「共贖者」という称号を使用するのに何の問題もない、他の神学者のグループもありますが、この人たちはこの真理をドグマとする必要を全く認めません。また、他のグループはドグマに対しては理解を示しますが、近い将来のドグマの告知は賢明でないと考えます。

いずれの場合にも言えることは、神学的話し合いは、論争であってはならないということです。兄弟的愛を持ち、互いに尊重し合い、「神の民の信仰感覚(sensus fidei)」を考慮しつつ行わなければなりません。教皇ヨハネ・パウロ二世とその最も近い協力者であったヨゼフ・ラツチンガー枢機卿との関係は、その良いお手本になると思います。教皇ヨハネ・パウロ二世がこの称号を尊重して使用されたとき、教理聖省長官はご自分の意見を保留されました。しかしこのことは、決して彼らの友人関係、—それは教会に非常に実り豊かな益をもたらすものでしたが—を損なうものではありませんでした。

ひとつ確かなことは、ドグマはなんと言っても祈りの実りであり、苦しむ人々の心の中で育つということです。このドグマは人々の祈りと苦しみを通して実現するでしょう。ですから最も力強いドグマの執りなし手は、病気の人、苦しみにあえぐ人たちです。彼らの中には、ドグマのために命を捧げる用意のある人たちもいるのです。



## まことの平和への道

マリアを共贖者と呼ぶことが神学的に正しいかどうか、神学者たちは一教会の教導職に従順に従いながら一さらにこの問題に取り組んでいくでしょう。世界中のすべての司教が教皇様から意見を求められるでしょう。その上で教皇様は決定されるでしょう。

あるドグマが、ひとつの預言的な私的啓示に基づいて告知されるということは決してないとしても、このマリアのドグマが教会と世界に、豊かな恵みをもたらすことになるということを、一文字通り励ましとして一今すでに知ることが許されているとは、やはり並のことではないでしょう。というのは、すべての民の婦人は、新たな聖霊降臨と、それによる民族間の真の平和の訪れを約束してくださっているのです。(78)

「そして婦人は、聖霊が降臨するまで使徒たちのもとに留まりました。そのように、再び新たに聖霊降臨を取り次ぐために、世界中に散っている彼女の使徒と民のもとに来ることをも、婦人は許されたのです。…もしこのドグマが、最後の聖母のドグマが告知されたなら、『すべての民の婦人』は世界に平和を、まことの平和を与えるでしょう。」(1954年5月31日)

聖母の悪に対する勝利とその結果の世界平和という、ドグマによってもたらされる恵み豊かな効果が、婦人のご絵にはっきりと表されています。先にお話しましたように、地球の上に蛇はもう見えません。しかし、世界中に広がるサタンの全権力に打ち勝つためには、蛇の頭を踏み砕く方マリアが、「共贖者、仲介者、執りなし手」という彼女の使命のあますところなく、世界中に(ドグマという形で)荘厳に知られ、崇敬されなければなりません。

ドグマが告知されるかどうか、また、いつ告知されるかは、もちろん教皇様の決定にかかっています。どちらにしろ、告知される信仰内容をほとんどの人が理解できず、信者の大半がマリアへの信心を失っているという状況の間は、新しいマリアのドグマが告知されることはないでしょう。まだ、時期は来ていないと私たちは見えています。

では、どのようにしたらその時期は来るのでしょうか？ どのようにすれば人々はマリアを母として再び尊敬し、愛するようになり、そもそも「共贖者」としてマリアを知ることができるようになるのでしょうか？ 私たちが信者として毎日いったい具体的に何をすれば、御母はいつの日かマリアの最後のドグマによって崇敬されるようになるのでしょうか？ 答えを聖母がくださっています。「**これが今日の私のメッセージです。なぜなら時が迫っているからです。御子と十字架のために、執りなし手であり、平和と平安の使者である『すべての民の婦人』のために、大きな運動が起こらなければなりません。**」(1951年4月1日)



## 大きな世界的運動「マリア的な司牧プログラム」

聖母はいったいどんな大きな運動のことを言われているのでしょうか？ それは、ドグマと世界平和を準備するために、良い意向を持つあらゆる人々が平和的に貢献できる方法として、婦人の祈りとご絵を普及するようにと願われているということです。この普及の運動のことを、聖母は「**大きな世界的運動**」(1953年10月11日)、また「**救済と平和の業**」(1951年4月1日)と呼ばれました。

皆さんは、聖母がご絵と祈りの普及のことを「**救済と平和の業**」と呼ばれるのを聞いて、一瞬驚かれるかも知れません。しかし、マリアの使命が、私たちをイエスへと、私たちの救い主へと、秘跡へと、つまりは内的な平和へと導くことにあるということを知る人は、このような救いと平和の業に協力することに喜びを覚えるでしょう。

このことを私が本当にはっきりと認識したのは、ミッション旅行でパナマからニカラグアに向かった時です。。飛行機に乗る際に私は一人のスチュワーデスにご絵を渡しました。すると彼女はまだ離陸前に私の席にやって来て、ゆるしの秘跡を受けていいかどうかと聞いてきました。乗客へのサービスがすべて終わってから、かの女はゆるしの秘跡を受けました。その後彼女の顔は喜びに輝き、それに感染されたかのように、彼女の同僚もゆるしの秘跡を望んだのです。この時の私の驚きを想像できるでしょうか。この時、私にはやっと分かったのです。これはマリア様がなされたことだ。聖母がご自分の子供たちの心を救済の恵みに開いてくださったのだ、と。



私たちの誰もが、子供でさえも、ご絵をすべての兄弟姉妹に…信者であるかないかに関わらず…差し上げていいかどうか聞くことはできるではありませんか。

この偉大な「救済と平和の業」(1951年4月1日)を、イーダは地球の上に何十億も降り積る雪片のヴィジョンで見えています。(79)「ちょうど雪の一片ひとひらが地上に舞い降り、そして積もり、やがては厚い層になるように、この祈りと絵は世界中に広まり(80)、すべての民の心に染みとおってゆくでしょう。…まるで雪が溶けてひとりでに地に染み込んでいくように、祈りの実りである霊が、この祈りを毎日唱えるすべての人々の心に訪れるでしょう。」(1951年4月1日)



この世界運動の重要性を認識した幻視者イーダは、その生涯の終わりの日まで世界中にご絵を送り続けました。(81) その際、イーダはよく自分の無力さを体験したので、聖母はこのようにイーダを勇気づけられました。「恐れているのですか? 私が助けるではありませんか。絵がひとりでに広まっていくことにあなたは気づくでしょう。」(1951年4月15日)「マリアがそれに関する全責任を負います。」(1954年4月4日)



ここにお集まりの皆さん。一緒に働いてくださいというすべての民の御母のこの呼びかけは、私たち皆にも向けられているのです。

「奇跡を望む人たちに言いましょう。さあ、燃えるような熱心さでこの救済と平和の仕事に臨んでください。そうすれば、あなた方は奇跡を見るでしょう。」(1951年4月1日)「どうかあなた方にできるあらゆる手段を使って援助し、各自がそれぞれのやり方でこの普及のために心を配ってください。」(1952年6月15日)「この活動は一国のためのものではなく、すべての国の民のためのものです。」(1953年10月11日)「彼らには皆、この祈りを知る権利があります。世界は変わるということを私が保証します。」(1951年4月29日)「普及は修道院(82)を通して行われなければなりません。」(1953年3月20日)「…教会の中で、近代的手段を通して…」(1951年12月31日)「このようにして『すべての民の婦人』は町から町へ、国から国へと世界中にもたらされるでしょう。この簡単な祈りが唯一の共同体を産むでしょう。」(1952年2月17日)



これまでに婦人の祈りは70以上の言語に翻訳され、何百万枚もの祈りのカードが全大陸の数多くの国々にもたらされました。その間、アムステルダム恵みのチャペルには、多くの素晴らしい証し、回心、病気の癒し、そして人々が祈りのカードを通してマリアを個人的な母として知ることによって起こった、その他の奇跡の報告が寄せられています。





それに枢機卿方も、例えば、教皇庁東方教会省長官であられるローマにお住まいのシリア人イグナス・ムーサー世・ダウード枢機卿(83)や、各大陸から司教方がアムステルダムへ巡礼され、国際祈りの日にご自分たちの司教区で体験された恵みについて証言されました。例えば、この写真のミャンマーの最大の都市、ラングーンのチャールズ・ボー大司教(84, 85)のように。

今では婦人のご絵はあちこちの教会(86)やチャペルで見られるようになりました。多くの国では信者たちによって、婦人のご絵が、家庭、祈りのグループ、教区、修道院、学校(87)、牢獄を、…短期間、あるいは長期間…巡回訪問するように取り計られています。

しかし、皆さん、教会、病院、学校などの公の場所にご絵を置く場合は、その責任者に許可を得る必要があるのはもちろんのことです。



燃えるような熱心さで仕事に臨んでください！

聖母の願いにまったく新しい気持ちでお応えし、祈りのカードを愛を持って人々に配るよう、皆さんを勇気付けたいと思います。

新しいマリアのドグマの告知へ信者を準備させるために、この世界的運動を通して協力することができるというのは、なんと素晴らしい務めではありませんか。聖母はこのように言われているのです。「もし、このマリアの歴史の中で最後のドグマが告知されたなら、すべての民の婦人は世界に平和を、まことの平和を与えます。」(1954年5月31日)

何十億もの人が自分たちの救い主イエスについて、十字架の力についてなにも知りません。人類の大半が、マリアが彼らにとってまったく個人的な母親であることを知りません。私たちはこれについての責任を負えますか？ メディアによって人々は地球のどこでも生命を脅かす危険の情報を得ることができます。そして、その危険度と恐ろしさは日に日に増す一方ですが、その解決の糸口はどこにも見つかりません。しかし、聖母は解決策をご存知なのです。聖母は新たに、あのファティマの時のように、確実な救いのご計画を与えてくださいます。聖母は、「**大きな世界的運動**」という戦略を与えてくださったのです。聖母は、私たちの宣教の熱意を通してすべての民をこの運動に巻き込まなければならないと言われています。



このことを知り、理解することが許されている私たちカトリック信者には、ですから非常に大きな責任があります。事が起こってから、「あなた達はそれを知っていたんだって？ この世界的規模の大災害を回避する手段を知っていたんだって？ それなのに、教えてくれなかったのか？！」と言われるようなことになってはなりません。

不思議のメダイが、ご出現の10年後にはすでに10億個も人々の間に広まったことは周知のことです。今の時代には、一週間ですべての民の婦人の祈りのカードを同じだけ広めることが可能なのです。私たちは、司教方、司祭方と協力して、利用できる意思伝達機関やメディアを使えさえすればいいのです。ちょうどこのことについて、聖母は言われています。「教会の中で、また近代的手段によって、この祈りは広められなければなりません。」(1951年12月31日)



ここに大変印象的なニューヨークの夜の写真(88)がごらんになれます。このような写真を見ると、私はいつも思うのです。「なんと数多くの電光となんと数多く人々。かれらのうちの一人ひとりの中に神は住みたいと思われているのだ」と。誰もが神を心から愛するよう呼ばれているのです。マリアを彼らの母親として彼らのところへお連れするのは、私たちカトリック信者の役目です。—そうすれば、マリアは彼らの魂を聖霊に開いてくださるでしょう。



2001年9月11日にワールドトレードセンターが突然のテロ攻撃によって崩壊し、イラク戦争が始まりました。従軍司祭たちはわずかの間に5万枚の祈りのカードをアメリカ兵士たちに、カトリックではない兵士たちにも、配りました。(89) 彼らは一様に、「そうです。ちょうどこれが我々には必要なのです。…墮落、災害、戦争から守られるように！」と言いました。このようにしてアムステルダムでの祈りは、アメリカ合衆国の中で「平和のための御母の祈り」あるいは「御母の平和の祈り」としてやがて広く知られることとなりました。

例えば、アメリカ海軍のマンドト神父は2千枚の祈りのカードを直接、軍事船舶「USS Bataan」に送りました。南キャ

ロライナのチャールストン空軍基地では、デル・トロ神父が、祈りのカードがすべてのパイロットとそのチームの手に渡るようとりはかりました。また、陸軍の司祭カーソン神父は、彼の部隊であるテキサスの大隊のために、イラクに向けて飛び立つ寸前に3千枚の祈りのカードを入手しました。

このようにして、三ヶ月間で25万枚の祈りのカードがアメリカで配られたのです。

世界で一番大きなカトリックのテレビ放送、EWTNでは、当時アムステルダムの祈りが一時間おきにテロップで流れていました。



## 「ドイツのことはとりわけ心にかけています！」

巡礼者の皆さん！アムステルダムメッセージの中で、聖母は繰り返し、ひとつひとつの国に向かって話されました。ここで気づかれるのは、すべての民の御母が他の国に対しては見られないほど頻繁にドイツに向けて話されているということです。ドイツに対して少なくとも12のメッセージを与えられ、30回も名指しで呼ばれています。

幻視者は幾度となく婦人がドイツの上にしっかり足を置かれている…これにはいつも特別に意味がある…のを見ています。

ドイツで婦人は短くも、力あるご自分の祈りを啓示されました。婦人のご絵が描かれたのもドイツでした。そして、婦人はドイツから祈りとご絵の普及が始まるのを望まれました。実際、ここで最初の祈りのカードは配られたのです！オランダと並んで、ドイツは唯一無二の任務を帯び、大きな責任を負っているのです！

聖母は心配に満ちた母なる愛をもって、この二つの国に繰り返し言葉をかけられ、彼らの困難な状況を描写しました。「オランダは墮落の縁に立っています。ですから、私は自らの足をオランダの上に置きました。私の言葉をオランダから世界に知らせたいと思います。私のもう片方の足はドイツの上にあります。神の母はドイツの子供たちのために泣いています。(90) ドイツの人たちはいつも私の子供でした。ですから、私はドイツからも『すべての民の婦人』として世界にもたらされたいのです。」(1951年8月15日)

実に婦人は現在の状況を驚くほどの確に表現されました。ドイツもオランダも教会がまだ人で溢れていた50年以上も前に、婦人は今日の棄教の状態(91)、誰にも予想できなかった今の状態について話されたのです。

「若者は近代的異教から守られなければなりません。」(1949年12月3日)「ドイツよ、警戒しなさい！…人々は善いのです。しかし、彼らはあれやこれやのものに心を奪われ、もはや出口を見つけれなくなっています。かわいそうなドイツよ！」(1949年12月16日)「ドイツはペテンにかけられるでしょう。」(1950年5月27日)



「他の側の者たちが、ドイツの民をローマから引き離すために懸命に働いています。…ドイツを破壊するために、他の側の者たちが働いています。」(1950年11月16日)「ドイツのことはとりわけ心にかけています。」(1951年2月11日)「御子は特別な保護を与えたいとお思いになり、ドイツを助けるために私をお遣わしになりました。」(1950年11月16日)「この国においては、遙かかなたに道をそれてしまった人々を中心地である十字架へと連れ戻すために、懸命に、懸命に働かなければなりません。司祭の数が少なすぎるとはいえ、信者は大勢います。…ドイツでは何よりも大きな愛と慈善をもって人々に働きかけなさい。」(1951年2月11日)





92

この言葉がどのように劇的に現実のものになったか、今は引退されたヴュルツブルクのヘルムート・バウワー司教(92)が、すでに9年前2000年10月13日にファティマの日のスピーチで言われています。司教は「私たちの信仰の悲惨な状態、神に対する軽視、神の拒絶」について話され、ドイツでは宗教を持つ人はもはや人口の半分にも満たないことを示されました。新しいドイツ連邦では、80パーセントが洗礼を受けていないのです！

バウワー司教は次のように言われました。「我が国の信仰の内的危機を私たちは真剣に自覚しなければなりません。私たちの家庭内では今や神は見知らぬ存在となっており、家庭の祈りはありません。人は信仰について語ることを恥ずかしく感じ、おじいさん、おばあさん方も例外ではありません。今、目覚める時が来たのです！神がマリアを通してこの世に來られたように、今日でもマ

リアを通して行く以外には、道はありません！」バウワー司教はマリアと共に歩む道についてなんと正しいことを言っておられることでしょう！



93

今の時代は、すでに子供たちや青少年たちにおいて、母親の優しさを経験できなかったという内的な傷ゆえに、その行動に目だって破壊的なものが見られます。その様な時代にマリアは母として、すべての民の母として、聖母の愛で私たちを癒すために來られます。聖母はイーダに、「ご聖体の体験」と呼ばれる(1958年にメッセージと並行して始まり、1984年3月25日まで公にされている)一連のヴィジョンの中で、端的にその理由を述べられました。つまり聖母はこのように言われています。「母のいない教会、母のいない民族は、まるで魂のない身体のようなものです。」(ご聖体の体験 1965年5月31日)



94

長年、精神的に病んだ子供たちや青少年たちの世話をしたクリスタ・メヴァスも彼女の経験から、この母と子の関係についてこう語っています。「生まれた時にはもう子供は母親の心臓の鼓動を知っています。母親の声、自分の母親の母乳(93)の独特の味を、羊水とよく似たその味を知っています。…生まれて数週間後には母親の顔を目に刻みます。(94) 母親は自分の命の保証なのですから、子供は母親の顔を覚えなければなりません。この保証人が長い間いないと、子供は生命の危険を感じます。子供は最初の二、三年、安心できる母親の心臓の音を必要とします。母親は、子供が泣くと本能的に心臓の音が聞こえるように自分の左側に子供を抱きかかえるものです。(95) 子供は胎内にいた時からこの鼓動のリズムを知っているのです。」

母であり学者である彼女がここで示したことは、同じように信仰生活にも言えることです。ここで、もう一度、すべての民の御母の愛に満ちた言葉を聞いてみましょう。

「母のいない教会、母のいない民族は、まるで魂のない身体のようなものです。」



95





「これをよく理解してください。主も生まれるために母親を必要とされました。(96) 母を通して命が生まれるのです。ですから、彼女(訳注:聖母のこと)をもう一度あなた方の教会へ、諸国の民の中に連れ戻さなければなりません。そうすれば、あなた方は開花を体験するでしょう。」(ご聖体の体験 1973年3月25日)

教会の開花というこの奇跡は、疑いなく、ここドイツでも、そしてヨーロッパで、そして全大陸で起こるのです！



しかし、私たちは確信を新たにし、全力を注いで、婦人のご絵と祈りの普及(97)に努めなければなりません。これはすべての民の御母が与えてくださった**救い**と**平和**をもたらす**世界的運動**なのです。なぜなら、この「マリア」という道によって、この「母」という道によって、神はすべての民族をまことの平和へ導きたいと望まれているからです。(98)

このことを聖母は1955年5月31日のメッセージで保証されています。

「婦人はあなたがたとの約束を果たし、まことの平和が訪れるでしょう。」





2009年5月31日ケルン祈りの日に参加された、ヨアヒム・マイスナー枢機卿、ヨゼフ・M・プント司教、すべての司祭と信者たちは、聖霊降臨祭のごミサの終わりに、教皇ヨハネ・パウロ二世が1984年3月25日にサン・ピエトロ広場で世界をマリアの汚れなき御心へ奉獻された際に祈られた、奉獻の祈りを祈りました。





パウロ・マリア・ジーグル神父は、  
1949年10月22日オーストリアのチロール地方ナッタースに生まれた。  
1992年12月8日ファティマのご出現のチャペルにて司祭に叙階される。  
パウロ神父は、国際宣教会「PDF-マリアの家族」(the international missionary community of pontifical right “PDF-Family of Mary”)の指導者であり、  
かつ、聖職者省設立の「大司祭イエスの御業」会 (the international public clerical association of pontifical right “Work of Jesus the High Priest” (Opus J.S.S.)) の  
創立者兼総長である。  
幻視者イーダ・ペアダマンとは25年以上にわたり親交があり、  
彼女はパウロ神父の司祭職の霊的母であった。  
そのため、パウロ神父はアムステルダムメッセージを  
最もよく知る人の一人に数えられている。

#### 写真

表紙:ケルン・ドーム

裏表紙:Wallraf-Richartzケルン美術館

この講話、また「すべての民の御母」に関するインフォメーション:

日本  
〒114-0002 東京都北区  
王子5-5-13-102  
すべての民の御母 日本公式サイト  
<http://subetami.divinemeracy.jp/>

オランダ  
(「すべての民の御母」の恵みのチャペル)  
Chapel of the Lady of All Nations  
Diepenbrockstraat 3,  
NL-1077 VX Amsterdam  
Tel. +31 (0)20-662 05 04  
[info@de-vrouwe.net](mailto:info@de-vrouwe.net)  
[www.de-vrouwe.info](http://www.de-vrouwe.info)  
「マリアの家族」による「すべての民の御母」  
に関するホームページ



聖霊降臨の奇跡—1350年ごろ  
ケルンの作者による

次の言葉をよく理解しなさい。

『すべての民の婦人』に願うなら

婦人は世界中の民に『恵み・救い・平和』を  
与えることが許されていますし、与えるでしょう。  
しかし、あなた方は皆、『すべての民の婦人』を  
全世界にもたらさなければなりません。

1952年2月17日 アムステルダムメッセージより